

八景式風景観賞法による風景解釈の現在の有効性に関する考察 — 金沢八景を事例として —

Landscape perception based on “Hakkei” — Chinese-style appreciation of eight-scenery — and its validity in modern context — Examples form Kanzawa Hakkei —

正会員 野上陽子

Yoko NOGAMI

Abstract

Abstract: This research aims to find a way to make the most of the scenic beauty of “Hakkei” as a resource of a place for town planning activities. For this purpose, Hakkei (Chinese-style appreciation of eight-scenery) is analysed and the validity of its results for landscape perception in the modern context is proved. Well-balanced landscape of Hakkei is consisted of “8 Characters”. Restructuring of these characters is crucial for the future of the town. Varied existing town planning groups will play important roles for the restructuring and coordinating systems for diverse people who are participating in town planning activities should be further promoted.

Keywords

Hakkei (Chinese-style appreciation of eight-scenery), Landscape Elements, Boundary, Ukiyo-e, Events for Town Planning
八景, 景観構成要素, 領域, 浮世絵版画, まちづくりイベント

① はじめに

(1) 研究の背景と目的

市民参加型のまちづくりが全国で取り組まれている。その過程では、まちの資源を発見し、価値付けを行い、市民主体で資源の保全・創出活動が行われることが一般的である。

八景は日本全国に分布しており、中国伝来の瀟湘八景を踏襲したもの、一部が異なったり追加されたもの、かなり瀟湘八景とは異なりその地方の名所を中心に約6-12景を選んだものがある¹⁾。その地域の特徴を示し、市民が愛着をもってまちづくりに参加するために、「八景」という名が果たす役割は大きい。

本研究では横浜市金沢八景を対象に、歴史性に富む風景を地域資源に位置付け、いかにまちづくりに活用するか、市民活動との連動の可能性を探る。その為に八景式風景観賞法を分析し、これが現代の風景解釈にも有効であることを明らかにする。

(2) 本研究の位置付け

樋口は景観の「構造」に注目し、八景の空間構造を分析する視点を示している⁸⁾。飛田は浮世絵から景観構造分析をしている²⁾。また、上野、鈴木はうつろいをキーワードに八景の「空間演出」の装置に着目している³⁾。一方で鶴らは、景観の基本的「構成要素」を水・緑・道・まちなみの4つにわけて視対象を分析している。また、それらの景観がどのような「視点場」から、観察されているかを明らかにしようと試みている⁴⁾⁵⁾。本研究ではこのような既往の浮世絵・名所絵の分析手法を統合・整理する点で、方法論的な新しさを開拓しようと試みた。さらに、これらの分析方法をふまえた金沢八景の分析結果を、現在の風景へ適応し(4章)、まちづくりへの示唆を志向している点(5章)が、本研究の新規性である。

(3) 瀟湘八景

八景の始まりは、11世紀に北宋の画家宋迪が、中国湖南省の洞庭湖周辺の景観を選定した、瀟湘八景であるといわれる。描画のテーマは雨と柳、山寺と鐘、水面と月、夕暮れと雪、夕日、水田と雁、空と松原、船と港である⁶⁾。

(4) 金沢八景

金沢八景の起こりは、1677年に渡来した心越禅師によるとされる。心越禅師の故郷杭州西湖の風景になぞらえ、能見堂からの俯瞰景を8つの景として詠んでいる⁷⁾。

② 研究の手順

1. 八景の俯瞰図・各景を描いた浮世絵を空間構造要素・空間演出要素・観察の視点で分析。
2. 1を八景式風景観賞方法として「8つの特性」に整理。具体的構成要素と、絵図内での特性表出の様子を図表にまとめる。
3. 八景の現状を確認するため、1・2で用いた絵図と同一の場所の現在の写真から、「8つの特性」を確認し、地図上でも比較。さらに2で抽出した景観構成要素と照合。現八景の「8つの特性」間の相互関係を現況分析。
4. アンケート調査で、八景来訪者と在住者を対象に、「8つの特性」の認知度を調べる。

③ 金沢八景の風景特性

これまで八景を論じたものは、個々の8つの景に描かれた要素に注目したものが大半であるが、本来八景式風景の観賞法の

目的は、明媚な風景を8つ寄せ集めることではなく、注目する風景の構成要素を定めて、その場所の魅力を引き出すことにある。即ち、8つの景を含む全体な領域から、八景の分析を行う必要がある。ここでは、八景を空間構成要素・空間演出要素・観察の視点の3点から分析する。

(1) 空間構成要素 領域=境界・焦点・方向

八景の全範囲俯瞰景を対象に、八景がどのような空間構造を持っていたのかを明らかにする。八景を俯瞰した絵図金澤勝業一覧之図(図1)、武之金沢八景模写図(図2)より分析した。これは、金澤八景の俯瞰景への視点場が泥亀内海の埋め立て前後で変化しているためである。

樋口忠彦は「景観の構造」⁸⁾の中で空間の構成要素を境界、焦点・中心・目標、方向、領域という4つの要素に分類している。これに基づき金澤八景の空間を以下のように分析し、表1に具体的な要素を近・中・遠景ごとにまとめた。

- ・境界：連続した山なみ・丘陵・川・海
- ・焦点・中心・目標：平地に突出した丘陵、尾根、独立丘、独立峰
- ・方向：平地からそびえる山や地表面の傾斜や両側からせばまり、あるいはひろがっていく谷や水の流れや東西南北という方位や卓越風の方向など
- ・領域：以上3つの要素により関係づけられた領域

図3・4、表1より、境界、焦点・中心・目標、方向から構成される八景の領域は、泥亀内海・平潟湾・内川の水辺と、それらの周辺の山並み・独立峰・島によって構成されていることが確認できる。また、境界、方向において、乙鱸海岸などの水際を持つ形態が重要であり、金澤八景の特徴を強調している。さらに、中景に位置する夏島・烏帽子岩、遠景の三浦方面の山並み・鋸山・猿島などが、金澤八景の領域を越え、視線をさらに奥へと導き、深まりのある空間構造を実現していた。尚、境



図3 空間構成要素 能見堂より

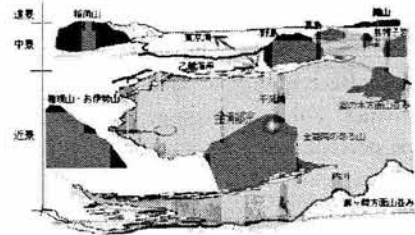


図4 空間構成要素 今龍院より

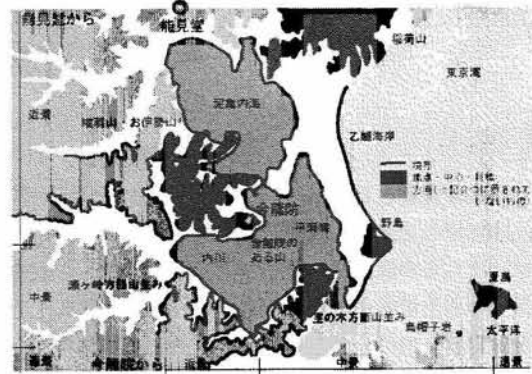


図5 空間構成要素

表1 近・中・遠景と空間構成要素の関係

構成要素	領域		
	境界	焦点・中心・目標	方向
近景	金龍院のある山	●○	●○
	福荷山	●○	●○
	権現山・お伊勢山	●○	●○
	侍従川・(泥亀内海)	●	●
中景	乙鱸海岸	●○	●○
	平潟湾・内川		●○
	烏帽子島	●○	●○
	夏島	●○	●○
	東山		●
遠景	室の木方面の山並み	●○	●○
	瀬ヶ崎方面山並み	●○	●○
	野島		●○
	二子山		●
	三浦方面山並み		●
	鋸山	●○	●○
	猿島		●
太平洋	●○	●○	
東京湾	●○	●○	

●能見堂から ○今龍院から

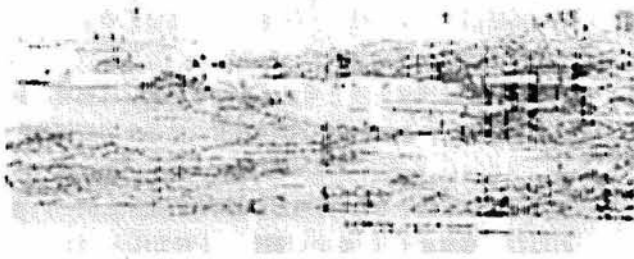


図1 金澤勝業一覧之図



図2 武之金沢八景模写図

界、焦点・中心・目標、方向の要素は、互いに重複するものが多数ある。以上より、空間構造の重要要素を以下にまとめる。

1. 湾・海・海岸線などの水辺
2. 風景の広がりをつくる近景・中景・遠景の島・山
3. 水辺を囲む山の連なり
4. 水際の形態

(2) 空間演出要素

次に八景絵図の八景の中で何が描かれているのかを明らかにする。八景式の風景鑑賞では、その場所での体験を高める条件や体験の方法が設けられている⁹⁾。ここでは、「空間演出要素」と名付ける。これらは(1)の空間構造要素を器として景観を構成する。分析の対象は、金澤八景の景色を個々の事物に注目して描いている歌川広重の八景絵図金龍院版、司馬越平版である(図6)。

結果、表2のように、金澤八景においても空間演出要素が多数抽出された。概要は以下にまとめることができる。

1. どの絵にも共通して、水辺(泥亀内海・平潟湾・内川他)が描かれている。
2. 水際は人々の滞留・通行の場として詳細に描写されており、道の景の中で描かれる人物は、旅人と、八景領域内で生活する人々の2つのタイプにわけられる。
3. 構図の背景として、時刻や季節によって変化する天候、月、太陽、雁、帆船などへの注目度が高い。
4. また各景で、(1)の空間構造要素が頻出しており、民家や橋などの人工的要素と緑などの自然要素とのバランスの中で景観を構成している。

八景の視点場と描写の範囲は下図8を参照。

(3) 観察の視点 視点場・視界

八景絵図には各々観察の視点場がある。図6をもとに、金澤八景が描かれた視点場と、そこからの視界を図8に示す。

1. 八景の視点場は全て水際に位置する。
2. 視界を見ると乙鱸海岸・内川などの水際への注目度が高い。
3. 野鳥は八景のうち3景に登場し、八景領域内の象徴となっている。
4. (1)空間構造要素に含まれる要素の多くが、金澤八景絵図の中にも出現している。

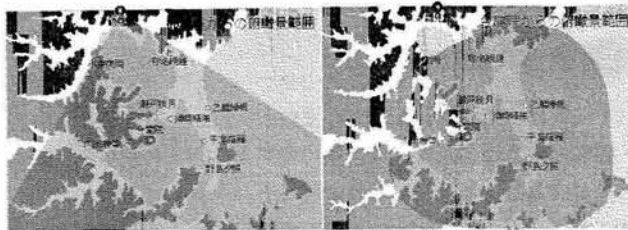


図7 俯瞰景の視点場の変化

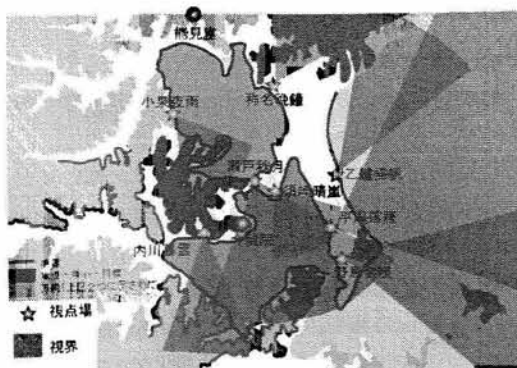


図8 金澤八景の視点場と視界

表3 空間構造・空間演出要素・視点と視界の関係

構成要素	(1)空間構造要素		(2)空間演出要素		(3)視点と視界										
	○(俯瞰図より)		●(八景絵図より)		□(八景絵図より)										
	境界	集・中目	方面	小泉	称名	瀬戸	内川	野鳥	平潟	洲崎	乙鱸				
水辺	待従川(泥海内海)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	平潟湾		○												
	内川		○												
	太平洋	○	○												
	東京湾	○	○												
水際	待従川(泥海内海)沿い		○												
	平潟湾沿い														
	内川沿い														
	乙鱸海岸														
山・島	野鳥														
	金龍院のある山		○	○											
	稲荷山	○	○	○											
	権現山・お伊勢山	○	○	○											
	室の木方面の山並み		○	○											
	瀬ヶ崎方面の山並み	○													
	夏島		○	○											
	鳥帽子岩		○	○											
	二子山		○	○											
	三浦方面山並み		○	○											
	鋸山	○	○	○											
	猿島		○	○											

視点場の変化

俯瞰景を得る視点場は、江戸時代前期の能見堂からより外海に近い今龍院へ移動している。これは泥亀内海の新田開発による埋め立てが行われたためである(図7)。

(4) 金澤八景の特徴 — 「8つの特性」

以上(1)～(3)の関係を表3にまとめる。これは、空間構造要素を軸にまとめたもので、空間演出要素、視点と視界については、八景絵図の各景が八景領域内のどの空間に注目しているかにより分類した。なお、分析対象の絵が2枚以上ある場合は、一方に含まれていれば表に記入した。これより、八景が(1)～(3)の相互関係によって成り立っていることが確認できる。

8つの特性

(1)～(3)を融合し、以下に「8つの特性」としてまとめる。表1(空間構造要素)、表2(空間演出要素)、表3(1～3の関係)を融合し、表4の縦軸に8つの特性の具体的な要素をまとめる。図9で、8つの特性のかつての八景での表出の様子を図示した。

なお、8つの特性を特に図9で八景絵図の中で確認したのは、江戸後期になると、金澤八景の俯瞰景を得る視点場が今龍院に移動し、かつ俯瞰景よりも、8つの視点場からの個々の景に注目していく傾向が強くなったためである⁷⁾。

- 1 内と外：八景の領域は、泥亀内海・平潟湾・内川の水辺と、それらの周辺の山並み、野鳥など海面に突き出した丘や島によって構成され、明確な内外性をもっていた。
- 2 広がり：海から突出した今龍院のある山・野鳥・室の木方面の山・夏島・鳥帽子岩などは、各々近景・中景・遠景を構成し、海に向かって景色が段階的に広がる特性を生み出している。尚、近景では、ある程度密度のある民家、人々、植物、船他、中景は視点を奥へ導く島々、遠景は海上へと連なる山々がある。
- 3 連続したスカイライン：湾を取り囲む山々の連続線。八景

表4 8つの特性の構成要素

空間構造要素	8つの特性	内と外	広がり	スカイライン	波形	粗と密	うつろい	流れ溜まり		視点場	
								流れ	溜まり		
近景	山・島	●	●	●						○	
	山・島	●	●	●							
	山・島	●	●	●							
	水辺	○			○	○	○				
	中景	水辺				●	●	●			
		水辺				●	●	●			
		山・島	○	○							
		山・島	●	●							
		山・島	●	●							
		山・島	●	●							
	遠景	山・島	●	●	●						
		山・島	●	●	●						
山・島		●	●	●							
山・島		●	●	●							
山・島		●	●	●							
山・島		●	●	●							
山・島		●	●	●							
山・島		●	●	●							
山・島		●	●	●							
水辺		●	●	●							
気象	月							●	●		
	雨							●	●		
	夕日							●	●		
	雪							●	●		
	風							●	●		
	霧							●	●		
	煙							●	●		
	松							●	●		
	杉							●	●		
	落葉樹							●	●		
植	植							●	●		
	植							●	●		
	植							●	●		
	植							●	●		
動物	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
	水辺							○	○		
人物	道										
	道										
	道										
	道										
	道										
	道										
	道										
	道										
	道										
	道										
建造物	寺										
	寺										
	寺										
	寺										
	寺										
	寺										
	寺										
	寺										
	寺										
	寺										
現代出現したもの	橋										
	橋										
	橋										
	橋										
	橋										
	橋										
	橋										
	橋										
	橋										
	橋										

● 現代までに減少したもの ○ 現代までに喪失したもの
◇ 現代出現したものの

のまとまりある領域を成立させる大きな要因になっていた。
1、2に共通する要素である。
4 波形：海岸線の形状と、そこでの風景の重層的重なりを指す。(1)の方向の大部分が、海岸線の形状で占められている。ひだは人々の動線をスムーズに海辺へ導くことになり、空間の

方向づけの大きな要因となっていた。また、(2)空間演出要素では海と陸の接点がひだ状(波形)なことにより、ある地点から水際を見通すと様々な構成要素が重なった風景が見られる。

5 粗と密のバランス：自然の地形と人工的な構造物の集合のバランスのこと。(1)空間構成要素では、山々や島々、その中心に位置する湾という具合に金澤八景の領域は定められているが、(2)空間演出要素では、それらが、視覚的にきちんと認識できる状態であることが重要であるといえる。

6 うつろい：時刻や季節により変化することから。潮の満ち干きによって海岸線が変化し、ダイナミックに景観が変わる場所、たなびく霞、塩焼き小屋から出る煙、水面を走る船など。八景各景の構造の背景であり、その場所の空間体験を高める。

7 流れと溜まり：生活者の視点と訪問者(観光客)としての2つの視点が、八景絵図にはある。そもそも金澤八景の成立は中国からの渡来僧によるものであり、江戸時代の人気も、外の人八景の魅力を引き出したことが大きい¹¹⁾。特に水辺では、この2つの視点を成立させる、じっくりと景色を眺める「溜まり」と、通りすがら動線上で景色を連続したものとして眺める「流れ」を可能にする場所があるといえる。

8 視点と視界：八景絵図の視点場は、表3で抽出された水辺に点在している。また、視野の範囲は(1)空間構成要素において重要な要素を内包している。俯瞰景を得る視点場は、江戸時代前期の能見堂から、後により外海に近い今龍院へ移動した。

(5) まとめ 一魅力ある八景景観のポイント

金澤八景が浮世絵の対象として盛んに描かれていた時代には、風光明媚な風景を構成する、以下の特徴があった。
・ 8つの特性が、実際の風景の中で容易に確認できた
・ 8つの特性を構成する、空間構成要素・空間演出要素・観察の視点が相互にバランスを保ち、全体の風景を構成していた

4 金澤八景の現状

(1) 写真上で見る現状

図10は八景の各景とほぼ同様の箇所から現代の風景を撮影したものである。これらの写真を見ると、一見して8つの特性が確認しづらくなっていることがわかる。8つの特性を構成する各要素(表4 縦軸)は辛うじて識別できるが、8つの特性間同士のバランス、相互関係は希薄になっていると予想される。

(2) 地図上で見る現状・構成要素の現状

(1)は、地図上で今昔の比較をすると、より明確である。図11・表4で8つの特性の構成要素の現況をまとめる。
内と外： かつての八景の領域にある水辺は大幅に減少。加えて山並みが崩壊している。かつての定義による、山並みに囲まれた水辺としての八景の領域は、縮小している。
広がり： 近・中・遠景と段階的に広がっていた風景は、各景を構成する丘や山の減少、消滅により、遠近感を失っている(中景に著しい)。一方で、八景島シーパラダイスの水族館・遊園地施設が中距離景としてのアイススポットとして出現してい

る。

連続したスカイライン： かつての水辺付近の山並みは崩壊が激しい。また、高層マンションなどがラインの連続性を阻害。

波形： 陸から水際へ移行する場に直線が多用され、単調な景観である。また、水辺に近づける場所は限定されている。

粗と密のバランス： 粗（水面）が大幅に減少し、密（住宅など人工物）が増加している。故に空間の分節が確認しにくい。

うつろい： 要素が減少。一方で拡大した領域の海の公園・野島公園で、干潟、砂浜など時季で変化する要素に富む。

流れと溜まり： 道路・シーサイドラインなど流れ（通過過程）での八景への関わりが多い。溜まる場合は平潟湾では少ない。

視点と視界： 視点場が変化。視野が狭まっている。

(3) まとめ1 現在の金沢八景一

(1)~(3)より、空間構造要素が著しく減少・喪失している。現存していても後年出現したビル群などによって埋もれてしまっているものもある。一方で空間演出要素は、かつてと同一の要素が認められるものがあり、更に海の公園・野島など演出要素を創出する場所も増えている。観察の視点は、見通しのきく視点場が限定され、視野が狭まっている。また、道路・シーサイドラインなど通過路が増大し、水辺の滞留の場が減少している。

(4) まとめ2

一八景の領域の拡大・8つの特性を強化する可能性を持つ場所一

表4より、海の公園、野島公園、平潟湾プロムナード、八景島シーパラダイスが、現代新たに出現した（具体的な位置は図12参照）。これらは8つの特性を保持する重要地点であり、即ち、八景の領域の拡大を意味する。上記の地点はどれも公園や遊歩道など、人が滞留できる性格をもち、

既に地域住民、来訪者ともによく利用されていることから、今後の金沢八景の再生に欠かせない場所であり、これらを含む新しい八景の領域が人々に認識される必要がある。

5 地域資源としての金沢八景の可能性

前章までで金沢八景の特性は図象的には継承され、新たに出現しているものもあることが証明された。では、8つの特性は

表5 八景島の領域

属性	地元	領域 (単位人)							合計		
		a	b	c	d	e	f	その他		無回答	
在住	5年	イベント参加あり				3					3
		参加なし	3	2	1	1					7
	~10年	イベント参加あり				3					3
		参加なし				4					4
	10~20年	イベント参加あり									0
		参加なし			2	1	3			3	9
20年以上	イベント参加あり					7				7	
	参加なし	1	3	1	11	1	1		4	22	
来訪者	初回	—	10	1		2	1		1	15	
		イベント参加あり				1	2			3	
	リピーター	参加なし	12	2	2	8	4		4	32	
合計			26	10	6	44	6	1	12	105	

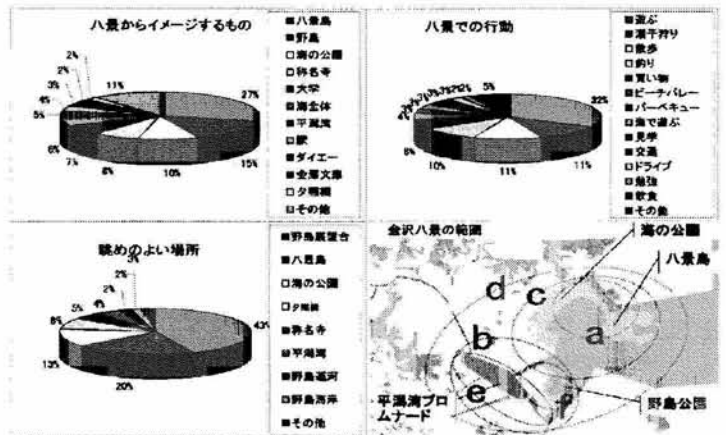


図12 アンケート結果

表2 空間演出要素

	小泉夜雨		称名晩鐘		瀬戸秋月		内川暮雪		野島夕照		平潟落雁		州崎晴嵐		乙鰯帰帆	
	金龍院	司馬越平	金龍院	司馬越平	金龍院	司馬越平	金龍院	司馬越平	金龍院	司馬越平	金龍院	司馬越平	金龍院	司馬越平	金龍院	司馬越平
天候	雨		晴		晴		雪		晴		晴		風		晴	
時刻	夜		夕方		夜		夕方		夕方		夕方		昼		夕方	
気象	雨		夕日		月		降雪後・曇		夕日		夕日		夕日		風	
動物											雁	雁				
水辺景	泥亀内海	泥亀内海	泥亀内海	泥亀内海	平潟湾・泥亀内海	平潟湾・泥亀内海	内川	内川	乙鰯海岸		平潟湾・東京湾	平潟湾・東京湾	平潟湾	平潟湾	平潟湾・東京湾	平潟湾・東京湾
水辺景		屋根つき運搬船	運搬船・停泊船		観光船・渡し舟	帆船・屋根つき運搬船・停泊帆船(帆なし)		屋根つき停泊船・屋根付き運搬船	運搬船・停泊船・屋根つき停泊船・漁船・観光船・渡し舟		帆船・移動用船		筏・屋根つき停泊船	帆船(帆なし)運搬船	帆船	帆船・帆船(帆なし)
緑	杉	杉・柳・山肌植生・水際植生	広葉樹	杉・山肌植生	松・落葉樹・茂み・山肌植生	松・民家の植栽・山肌植栽	落葉樹・茂み	松・水際植生・落葉樹	藁・山肌植栽・民家の植栽		松林・藁原	松・水際植生・藁	柳・藁・松並木・竹林	松林・山肌植生	松並木・山肌植栽・藁	松並木・山肌植栽
道の要人物	笠笠わらをかぶった旅人×2		船をこぐ人×3		多数 橋を歩く人・船に乗る人・料亭から眺める人	橋を歩く人・船に乗る人・料亭から眺める人	冥の笠をかぶった旅人×3・秤を担いだ人	船をこぐ人	漁をする人船をこぐ人×1観光船に乗る人×4		潮干狩りをする人×4		道を行く天秤を担いだ人	船をこぐ人・道を行く天秤を担いだ人	笠を被った釣り人×2乙鰯海岸	何かを担ぐ人・道ゆく人
道の景	泥亀内海沿い	泥亀内海沿い	泥亀内海沿い	泥亀内海沿い	瀬戸橋・平潟湾沿い	瀬戸橋・平潟湾沿い	内川沿い	内川沿い	乙鰯海岸・平潟湾		乙鰯海岸	乙鰯海岸	平潟湾沿い	平潟湾沿い	乙鰯海岸	乙鰯海岸
まちなみ	茅葺屋根民家・塩田小屋・燈	小泉弁天・民家	民家・橋・干している何か・船を繋ぐポール	称名寺・称名寺入り口石積み・民家	瀬戸橋・橋土台・石積み土台・千代本旅館・灯籠・門	瀬戸橋・橋土台・民家・千代本旅館・金龍院	藁葺屋根民家	金龍院・金龍院階段	民家・船をつなぐポール		民家・のりひび・橋		民家・網状の何か・石積み土手・民家の植栽の何か	民家	民家・瀬戸橋・石積み	民家
山・島	権現山・お伊勢山	権現山・お伊勢山	稲荷山	稲荷山	野島	野島	室の木方面山並み	金龍院のある山	野島・夏島・鳥帽子岩		野島				稲荷山	稲荷山



図6 八景絵図

図9 8つの特性表出

図10 現在の八景

表6 8つ特性の認知度

		属性									
		地元(単位延べ人数)				来訪者(単位延べ人数)					
		~5年	~10年	10~20年	20年以上	初回	リピーター				
					頻繁	1年に数回	1年に1回	数年に1回			
広がり	野島	5	1	4	14	4	9	6	6	3	
	八景島シーパラダイス	9	3	10	11	8	10	9	5	4	
連続したスカイライン	平湯湾西側	4	2	2	3	2	1	1			
	平湯湾東側			1	1	2					
波形	海の公園水際	2	1	2	4	1		4	2		
	野島住居群住居			1	3						
粗と密	海の公園海・空				2	1		1			
	うつつい	3	2	3	9	1	7	4	2		
うつつい	船	1	1	2	1	2				1	
	のりひび										

現果実として地域市民にどれ程認知されているのか、ここではアンケートから金沢八景の地域資源としての認知度を確認する。

(1) アンケートの実施内容

- ・目的：金沢八景の風景はどのように解釈されているか、8つの特性の構成要素の認知度を通じて調べる。
- ・日時：2003年5月4, 5日 海の公園と野島公園

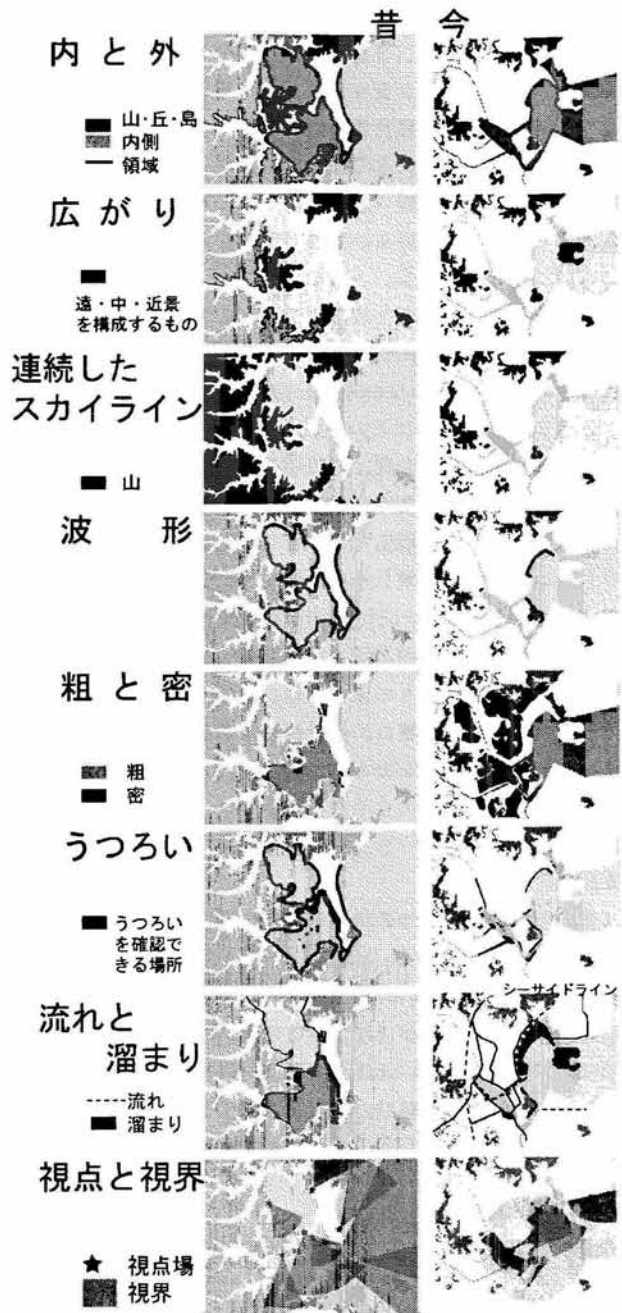


図11 8つの特性の今昔比較

※この日はゴールデンウィークの中日で、毎年恒例の潮干狩りが行われており、例年通常をはるかに上回る来訪者が予想され、不特定多数の被験者協力が得られるために設定した。

- ・被験者：潮干狩りに来ている人・釣り人(小学生～高齢者まで)・八景クラブ(市民活動団体)運営スタッフ
- ・サンプル数：134人(有効回答 105)
- ・調査項目：1金沢八景のイメージ/ 2金沢八景での行動/ 3金沢八景の範囲/ 4金沢八景の眺めのよい場所/ 5特徴のある八景の眺め
- ・手法：1・2は単語で用紙に記入、3・4は地図上に記入、5は図10と同じ写真8枚と、八景島・野島・海の公園の中で8つの特性を示す写真3枚の計11枚を被験者に見せ、どの部分を

一番特徴的に感じるか、印をつけてもらった。

なお、3は空間構造要素、1は空間演出要素、4、2は観察の視点場、5はこれら8つの特性の相互関係がどのように認識されているかを調査することを目的としている。また、属性の項目で八景をフィールドにしたイベント参加経験の有無を確認。

(2) まとめ

- 1 八景からイメージするもの：八景島・野島・海の公園という滞留の場の指摘率が高い。これらは、4(4)にある、拡大した八景の領域に含まれるものである。
- 2 金沢八景での行動：水辺の特性を活かし、海とたわむれたり潮干狩りや散歩を楽しむ人が多い。また、遊園地八景島でのレジャーへの言及も多かった。
- 3 領域：八景をフィールドにしたイベントに参加したことがある人は、八景の領域を大きくとらえる傾向にある(図12d)。まちづくりイベントはその土地と人びとを結び付け、新しい景観の領域を確立するひとつの有効な手段だと言える。
- 4 眺めがよい場所：360度の展望をもつ野島の展望台の指摘が多く、視界が開けて集客力のある八景島・海の公園が続く。
- 5 8つの特性の認識度：図10の写真に現れる特性は来訪者、地域住民にともによく認識されている。中でも、八景島・野島・海の公園の認識率は高い。また、八景の在住期間が長い人、八景に詳しい人はより多くの特性を指摘している。

(3) まちづくり活動への示唆

アンケートより、八景の特性は現代の文脈でも概ね認知されているが、野島・平湯湾への視界が得られにくくなっているために、八景来訪者のこれら空間構造要素への認知度は低い。地域市民・来訪者が8つの特性を把握するためには、まちづくり活動の担う役割が大きい。

6 まとめと考察 —今後の八景再生にむけて—

調和ある八景の風景は、空間構造要素・空間演出要素・観察の視点の3つから構成される。これらは更に、「8つの特性」として整理された。金沢八景「8つの特性」のうち、空間構造要素を担うものは減少、喪失など変化が著しい。空間演出要素は、現存が多く、新たに加わったものもある。観察の視点は、視点場が変化し、視界が狭まった。今後は8つの特性の構成要素で現存するものを保全・継承すること、更に8つの特性の要素を増やすように努め、特性間の関係の再構築が必要である。戦略として、まず8つの特性を認識し易くすること、次に8つの特性を体感し、楽しめる場所の確保と、市民参加の維持管理が望まれる。

著しく損壊した空間構造は、地区計画などによって景観の大幅な繕いをしたり、視点場の確保が必要であろう。空間演出要素は、アンケート調査にあるように、イベントなど現行の多様

なまちづくり活動が、要素の発見、強化に有効だと言える。観察の視点は、まちづくりに様々な主体が関わることで生活者と来訪者の両視点を担保できる。今後、更に特性間の繋がりを伸ばし、八景全体の視点からのまちづくりへ発展するには、住民・市民団体・行政・大学・企業など様々な活動主体が参加し、かつコーディネートする、現行の「金沢水の市民会議」のような仕組みの促進が望まれる。

「八景」は、現代の文脈でも重要な地域資源として、まちづくりを推し進める力をもっている。

参考文献

- 1) 田中誠雄, 金東必, 青木陽二: 日本における八景の分布について, ランドスケープ研究, 63(3), 246-248pp, 2000
- 2) 飛田範夫: 大阪府下の八景の特性, ランドスケープ研究, 65(5), 375-378pp, 2002
- 3) 上野訓, 鈴木信宏: 江戸八景にみる移ろいとその構造, 日本建築学会技術報告集, 第4号, 103, 98-103pp, 1997.3
- 4) 鶴心治: テクストの景観・絵画と詩歌の景観イメージ, 建築学会1996年度大会研懇会資料, 第111集第1392号, 155pp, 1996/07
- 5) 萩島哲・坂井猛・鶴心治: 広重の浮世絵風景画と景観デザイン—東海道五十三次と木曾街道六十九次の景観—, 九州大学出版会, 2004
- 6) 日本の美術No.124 瀟湘八景
- 7) 県立金沢文庫金沢区制五十周年記念事業実行委員会: 図説かなざわの歴史, 2001
- 8) 樋口忠彦: 空間の構造, 技法堂出版, 150-154 pp, 1988
- 9) 景観デザイン研究会: 景観用語事典, 彰国社, 1998
- 10) 県立金沢文庫: 東海道中一寸寄り道—金沢八景—, 2001
- 11) 県立金沢文庫金沢区制五十周年記念事業実行委員会: 六浦・金沢一海が育んだ歴史と文化—

(2004年6月4日原稿受理・2004年10月7日採用決定)